
レッドアップル

菜花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レッドアップル

【NZコード】

N2548E

【作者名】

菜花

【あらすじ】

日曜日に訪れた依頼人。そして依頼人と向かつたパーティーで事件が！？オリキャラあり。

第一話「依頼」

（五月十一日・日曜日）

何時ものように、コナンは事務所のソファーで小説をよんでもいた。そんな平凡な時間に事務所のチャイムがなつた。

「はーーー！」

いつものように蘭が扉を開ける。

「助けて下さい！！」

いきなりのSOSに三人は驚きその人を見た。小五郎はそく脱衣場にいき服を着替えその人の前にあらわれた。

「お嬢さん慌ててどうしましたか？」

今までの雰囲気とちがう小五郎に一人はジト目で見、女性は驚いていた。

「ほー。殺人予告ですな」

「はい」

（『今新しく作る会社から手をひけ。でなければ娘の命はない。娘の命が尽きる日五月十一日』か……娘ってことはこの人がか？）コナンの思考がフル回転を始めた。机においてある犯行文をよみ、

しい顔つき変わった。

「「」の娘というのは？」

「私は。申し送れました。私西条くるみとこます」

「西条つてあの財閥の？」

「わづよ。良く知ってるわねボウヤ」

「うんー。うう・言ひ事大好きなんだ」

子供スマイルをぐるみにみせまた険しい顔つきにかわった。

「それで新しく作られる会社とは？」

「はい。レッドアップブルジュエリー株式会社です。もうすぐ開催前のパーティーがあるので」

「もしや、五月十一日、明日といふことですな」

「はい。それでパーティーに来ていただけたら嬉しいのですが……」

「分かりました。お嬢さんをしつかり守りましょうー。」

高笑いする小五郎に呆れるコナンの脳裏に嫌な予感が過った。

「では三人分の招待状です。あとお一方の名前は？」

「あ。すみません私毛利蘭といいます。それから江戸川コナン君です。」

「よひしく」

「ナン」と蘭はくるみと握手をした。くるみは招待状を渡し事務所を

出ていった。

(まさか。守るだけだよな。それ以上ねえよな)

コナンは嫌な予感を無理矢理消した。

第一話～依頼～（後書き）

夜な夜な新作更新……。

なかなか眠れずに小説かいてたんです。
そして題名が思い付かずになんか題名に……センスゼロ。

気に入ったかた最後までお付き合いを。

では

第一話 似合いつ？・レッ ドアッ プル

五月十一日

三人は高層ビルにくるみと一緒に入っていった。

「すごい！ 林檎の形にカットされているんですね」

「……やうなんやあゆ。蠶やんは、ハーハーのかいじこねやん」

くるみが手にとつたのはとてもシンプルな林檎のペンダントだった。林檎に天使の羽をつけたデザインでとてもちいさかった。

「私に宝石なんて似合いませんよ」

蘭は手を降つてことわつた。

「そんな」とないわ。女性ですものねりと似合いますよ」

蘭は少し照れた顔になりつつそのペンダントをつけてもらつた。

蘭ねえかやん、こぐ似合ひよ！田のトレスはひだりだよ！

「ナニセ」「ナニセ」がいふせしゃこだ。
「ぬうがどひ」かしゅ

「コナン君が大きくなつたら蘭さんのプレゼントにいかが?」

くるみはクスッと笑いながら「ナンに田線を合わすためしゃがんだ。

「え！ それは……」

「ナンはまるで林檎のよつに真つ赤な顔になつた。

「ふふ。 ロナン君林檎になつてゐるわよ。 もあ皆さん会場にいきましょつ」

エレベーターで上がり会場に向かつた。会場では、たくさんの人人が集まつていた。

「これはこれはぐるみ様おまちして降りました」

「」

「紹介します。父の秘書をしてます高橋良さんです」

「あ、どうも探偵の毛利小五郎です」

「どうして探偵がいるのです？」

「私のボディーガードです。それから娘の毛利蘭さんと江戸川ロナン君です」

「」

「やつでしたか。 では」

高橋は一礼をして立ち去つた。

第一話～似合ひ～・レッドアップル～（後書き）

またまた夜中に更新！

今だから更新できる明日から夜中には更新できないな～。

さてさてまだ平和！レッドアップル君もなにもないまま時間が過ぎています！

照れるレッドアップル君がかわいいな～（笑）タイトル遊んでます（笑）

その前にわかりますよね？

レッドアップルが誰か。ここまで読んでくださった方々は！

では！

第三話～脅迫状～

～パーティー会場～
パーティーは着々と進められていた。

「あ、くるみー！」

「ママー、どうしたの？」

「くるみ宛に手紙がきてたのよ。はー」

その手紙は真っ白な封筒に“西条くるみ”とかいてあるだけだった。

「ありがとうー！」

「後でパパのところに行きなさいよ。ママ先にこっそくから

「スタスタ早歩きに立ち去つていった。

「さつきの人は私の母です。名前は西条秋。あ、さつきの手紙なん
なんだわ！」

恐る恐るあけてみたくるみの顔がかたまりワナワナ震え始めた。

「も、毛利さん……」

その異様な光景に小五郎は手紙をすぐにみた。

「パーティーの開始はお前の終わり。か……大丈夫この俺がくるみ
さんを守りぬきます」

「あ、ありがとう」「やあこまむ

くぬみは深々とお礼をした。

「ねえ、あれよつてのいるふくねおねえちゃんのお父さんって誰かな
してこの？」

「お前にいわれなくともわあつてゐるよ!!」

「いつて――！」

小五郎は拳でコナンの頭をなぐつた。

「お父さん何もそこまでする必要ないじゃない」

「マイツが口出しあるからだ！ ではないきもしよう。くるみわん」

一
え
え
え

くるみも口ナンを気にしながら小五郎の後をついていった。

「モーリー！ ハカン君に手荒なんだから……」

まだ痛そうに瘀血になってしまった左腕を差しのべた。

「から」

「ル、ル、ル」

しゃがんでいた蘭がたち上がり手を繋ぎ小五郎のこゑとじれまで小

走りで向かつた。

第三話～脅迫状～（後書き）

三話です！

コナンの風物詩になつてゐる小五郎がコナンをボコ
平和だな

もう時期事件が。
殺人じゃないので。

では

第四話～暗闇で～

父親のところに向かう途中、会場が停電となつた。ざわめく会場でキラリと光る凶器をコナンは発見した。

「危ない！！」

コナンはくるみを押した。くるみとコナンはその場に倒れこんだ。数分後会場の電気が普及し、二人は起き上がり床を見た。床にはナイフが落ちていた。

「大丈夫ですか？くるみさん！」

真っ先に駆け寄ったのは蘭だった。

「ええ。コナン君が助けてくれたわ」

くるみは一ヶコリコナンにほほえんだ。

「ありがとうコナン君」

「え？　べ、別にたいしたことしてないよ……はは

少し照れながら皿をそらすコナンにクスッと笑つた。

「それよりくるみさん早く参りましょ！」

小五郎は先ほどのナイフをハンカチに包み先を急いだ。くるみや小五郎たちは父親のいる部屋に入った。

「パパ」

「くるみ！　大丈夫だつたか？」ノックと同時に入ったくるみをみ

て少々おどろいていたが直ぐ我にかえり娘を心配した顔になつた。

「ええ。大丈夫」

「そつか。電氣はもうついたみたいだからパーティーはそのまま」

「だめ！パパ、パーティーは中止にしてほしいの…」

ほつとしたのはつかの間、くるみの慌ただし態度に先ほどのおどろいた顔になつた。

「その前に一つきいていいか？」

「え？何パパ？」

「後ろの方がたは？」

「そうだわ、この方は探偵の毛利小五郎さん娘の蘭さんと江戸川口ナン君」

「…」やはりパパの西条孝夫

紹介されみんなはお辞儀をした。

「そつか。くるみ探偵に以来したんだね」

「…めんパパ。でも…わくて……さつき停電の中襲われたの…」

くるみの声は少し震えていた。父親の孝夫はだれよりも大きな目をしていた。

「そ、それでくるみ大丈夫だったのか…？」

「大丈夫……コナン君が守ってくれたから」孝夫の目はますます大きくなりコナンを見た。コナンは真剣そのものの顔で孝夫をみた。

「その話についてお話してくれませんか？」

小五郎がくるみのよに歩いてきた。

「まず、脅迫状について警察には？」

「いえ。よくあることで伝える必要はない」

孝夫はきつぱりいい小五郎を睨んだ。

「しかしですなあ。」ついてくるみさんが狙われたのですよ？」

孝夫は無言のまま田をそらした。

「孝夫さん…！」

小五郎は孝夫をしつかりと睨んだ。

「パパお願い！」

くるみも必死で頭を下げた。しかし孝夫は承知の言葉を言わずに部屋から出ていった。

その後ろで二人の男が礼をして孝夫後についた。

「先ほどのお二人は？」

「あ、はい。パパのボーディガードの土山様と安西様です」

「ボーディガードですか。また凄いですね」

「はい、財閥の一・一を争う父親です」

ボーディガードの説明も終わり辺りが静まりかえった。

「おじさん、トイレについてくるね」

「ナンが出てこいつとする手をくるみが掴んだ。

「え?」

「ナン君道しらないでしょ? 私がつれていくわ」

「ナンの腕をしつかり握る手は少しだけ震えて力が入っていた。

「ぐるみさん。あなたは狙われてる身、こんなボウズにと居ますと」

「大丈夫です。トイレに行くだけですから! もしものことがあればパパと警察をお願いします」

「ですが!」

小五郎が引き留めるのも聞かず、くるみはナンの手を引いてその部屋から出でていった。

第四話～暗闇で～（後書き）

事件発生です！

これから

どうなるかな……

しかし題名未だ思い付かない！！

ネーミングセンスですね

では

詰まらないかもしませんが評価感想よろしければお願ひします！

第五話～犯人登場～

「コナンとくろみはトイレに向かう廊下を歩いていた。

「さつきは」「めんね……強く握りしめちゃたつて」

「それはいいけど、どうして僕と一緒にきたの？」

子供顔から一変したコナンの鋭い目がくるみを見た。くるみは少し
びくついて黙りこんだ。

「……あそこに居るのが嫌だつたから」

小さな声でコナンがギリギリ聞こえるような感じだった。

「大人は信用できない……パパは私を守ろうとしなかつた脅迫状が
届いてもパパは警察にもいわなかつた……毛利さんもそう……ナイ
フで狙われても私を守ってくれなかつた守つてくれたのはコナン君
だけだつた……大人の側にいても守つてくれない。ならコナン君と
いた方が大丈夫な気がしたの」

くるみとコナンの目が合つた。先ほどよりも断然鋭い目付きになつ
てたコナンからまた目を反らした。

「自分の命くらい自分で守りなよ」

「え……？」

「いつも俺がいるわけねえし、父親がどうあれおっちゃんはあんた
を守る為にここにきてんだ。おっちゃんも信用できねえなら人を頼

るんじゃねえよ

コナンは一呼吸置いた。

「それに脅迫状を出したのあんただよな？」

「え？ どうして…？」

「試したんだろう？ 自分が狙われたら父親はどう行動するか。でもあんたの父親は何もしてくれなかつた……むしろそのままの状態で無視をした。ちがうか？」

「コナンはポケットに手を突っ込みながら前に歩く。あつといつ間にトイレの前に着いた。その間ぐるみは一言も何も言わずにいついていた。静まり帰つた廊下からやつとくるみから口を開いた。

「そ、う、よ……あ、れ、は、私、が、送、つ、た、脅、迫、状、パ、パ、に、振、り、向、い、て、欲、し、か、つ、た、の、よ。、凄、い、わ、ね。」

「コナン君……貴方一体何者なの？」

「江戸川コナン。探偵さー。」

得意氣に名乗るコナンに関心してくるぐるみ。

「でも、ナイフは私が仕掛けた物じゃないわ」

「だらうな。脅迫状を知つてゐる奴の犯行か調べた奴の犯行」

得意氣な顔から真剣な眼差しでくるみを見上げた。目の前にあるトイレに入らずに脇にある非常階段の扉を開け壁にもたれまたポケットに手を突っ込んだ。くるみも非常階段の扉を静かに閉めてコナンの前にたつた。

「この事知つてゐるのはパパとママへりこしかいないと想いつ

「ホントに？ 誰かに相談とかしてない？」

「相談……あ！ 秘書の高松さん。ママが相談してたわ」

少し大きな声になつてしまつたくるみにコナンは人差し指を自分の口の前にたたせ静かにするように示した。くるみは慌てて口を両手で抑えた。

「犯人は秘書の高松さんってわけか」

そこで話しを一旦辞めて非常階段の扉をあけた。がそこには人影が見えた。

「くるみさん！ 階段上がつて！ 早く！ ！」

「え！？ コナン君も！ ！」

「俺はいいから早く！」

くるみはコナンに言われた通りに階段を上がつた。

それを見届けたコナンはその影を睨んだ。

「話し全部きいていたんでしょ？」

かわいらしい子供の声。さつきくるみに叫んだのとは全くの別人。

「ちがいますよ。ただ貴方たちを探しにきただけですよ」

不適に笑う高松。

「探しにどうする気？ 後ろに隠してある“物”で殺す気？ ばれ
ばれだよ高松さん？」

思いもよらない発言に驚いた高松に今度はコナンが不適に笑った。

「コナン君ーん！早く来てーー！」

叫ぶくるみが上から顔を出した。

「バカーーー早く階段登れーーー！」

高松から田を反らしたコナンを後ろでもつていた“物”でコナンを
殴つた。

「コナン君ーー！」

その光景をみたくるみが一田散にかけ降りた。

「だから……くんなつて……」

意識が朦朧とする中必死で声をしぼり出す。くるみが到達したところ
には高松がコナンを抱えていた。

「ねえー返してーーコナン君を返してーー」

お年頃とは思えない泣き声でくるみは高松に反抗した。

第五話～犯人登場～（後書き）

お待たせしました。

学校忙しくて投稿進み具合遅れぎみ。

犯人お出ましです！！

時間有れば後一話今日送るかな。 確率35%

では

第六話～暗号～

「人お互いににらみ合いが数秒間続いた。しかし、口ナンを助け出す術などみつからなかつた。

「ぐるみさん今から行くところと一緒にきてもいいつむ？」

「ど……こ……？」

震えた声と涙声がかさなり少し言葉にならないぐるみの声。高松がかるく“クツクツクツ”と笑う

「鶴の川」

ぐるみは頷くしかなかつた。

「その前に毛利さんたちにつまく話してこ」

トイレで顔を洗い何時もの顔になつた。

ぐるみが小五郎たちのぐる部屋に戻つた。

「あー、ぐるみさん。遅かつたじゃない」

「「めんなさい……」「ナン君がお腹痛いって言つてたから私の使いに家まで送り届けました」

「えーーー。」

蘭は驚きすかげず心配そつた顔になつた。

「毛利さんすぐに家に帰つてあげて下さー」

くるみは一礼をした。

「しかしですなあ」

「大丈夫です。また明日伺います。あそだわー!」「くるみは机の上にあるべんと紙に何かを書き渡した。「わたしのアドレスです」

小五郎に紙を渡し背中を押した。

小五郎は不機嫌そうにその場からでていった。

(お願い気付いて)

くるみは祈りながら高松のもとに戻った。

～タクシーの中～

先ほどくるみからもらった紙がきになり紙に田を落とした。少し荒れた字で何か書いていた。

「　　help鶴の川へ

　これをみて!
　何もない所
　んなところ嫌
　君がいれば彼
　を止められる
　助けにきて。

けど遅くならないで
手遅れになるから
初めの字カタカナ
やつぱり平仮名に
くるみより

「なんだこりゃ」

くるみからもらつた紙にいそいで書いた文字があつた。それをみり
なり、声をあげた。

「どうしたの？ お父さん？」

紙に向かって叫ぶ小五郎に蘭が声にたして読んだ。

「ヘルプ鶴の川へ

これを見て！ 何もない所、こんなところ嫌、君がいれば彼を止めら
れる、助けにきて。けど遅くならないで、手遅れになるから、初め
の字カタカナ、やつぱり平仮名に

くるみよりつてくるみさんからの手紙じやない！ しかも、助けに
きてつてこれくるみさんから「OSUじやない？」

焦りながら小五郎から紙を取り上げた。

「でも最後の文変よね。初めのつてとこ

小五郎に紙を見せて指をさした。

第六話～暗号～（後書き）

簡単な暗号ですがじつは解いてあげてくださいな

昨日投稿出来なく今日になってしましました。
お許しを……

では

第七話～理由～

小五郎と蘭はタクシーの中で手紙の最後を考え込んでいた。

「探偵事務所着きましたよ」

タクシーの人に言われて車からおりた。

「コナンぐーんど」！？

蘭は事務所内を探したが見当たらなかつた。

「お、おい蘭！」の文縦に読めるぞー！」

事務所の机に紙とペンをおき何かを書き始めた。
それを蘭に見せた。

「“”、な、ん、く、ん、を、た、す、け、て”——コナン君を
助けけてだわ！」

「ああ、やうだ。ぐるみさんとボウズが危険つことだー！」

小五郎はすぐにぐるみの携帯に電話をかけたがつながらなかつた。
その後直ぐに警察に連絡を入れた。

（鶴の川・地下）

真つ暗な場所でふわふわ揺れる灯りの中薄暗く遠くに見えるぐるみ
をうつすらしてきた意識の中コナンは目を覚ました。

軽く後ろに「くくられた縄を順序よく解いていく。手がせびナ呪をもほだいた。

「くぬみさん！」

睡眠薬でも飲まされているのか揺らしても寝息をたてていた。

「ちよつと起さるの早こよ」**コナン**「

振り向いたところに、高松がたつっていた。
高松の手には銃が握りしめられていた。

「動くなよ？ 動いたらくるみに当たるぞ」

しかし、素早く高松の方に動こうとした**コナン**に一発右足首に命中させた。**コナン**はよろけその場に手をついた。

「聞き分けの悪い子だな。動くなつていつたはずだ」
コナンは高松を睨み付けた。

「あんたがくるみさんを殺す理由つてなんだよ！」

痛みをこらえながら立ち上がった。

「あんたはくるみさんが出した脅迫状のこと知つてたんだろ？」「

「そりだよ。母親からきてたし、その前にくるみさんから相談つけとからな

「それでなぜくるみさんを狙つー？」

「くぬみさんが願つてたことだろ」「

睨みあいが続く中高松は不気味に笑う。

「くるみさんが願つてたのは父親に振り向いて欲しいってことだ」

「殺せば振り向いてくれると悪いよ？」

「何…？」

「俺は死んでもほしくない娘を無くしたんだ！くるみの父親にひき逃げされた…！」

高松の瞳から涙が溢れ出した。

「あの人は誰も死んでも悲しまない。お金にだけ愛をそそぐやつだ。そんな奴に娘を育てる資格なんてない。くるみさんが死んでも何食わぬ顔で一生暮らすことなど分かつきってる…」

「ちがう…」

反論しようとも力強く前に出たと同時に肩に弾がそれた。

「くるみ…！ おまえも死にてえのか…！」

拳銃を「ナンの胸へとセットした。しかし「ナンは引き下がるでもなく左手で肩を押さえて高松を睨みつけた。

「殺してえなら殺せよーでもな、自分の娘がひき逃げにあつたんだら、証拠つかんで警察に提出しろよ！ こんな復讐まがいなことしてんじやねえよー自分の娘が喜ぶとでも思つてんのか？ くるみさんを殺してそれで喜ぶと思つてんのか？ ちげえだろ！ ひき逃

げが、くるみさんの父親だつてわかつた時に警察に行くべきだろ！？ その方が娘さんにとつて一番の嬉しさだよ！ 今、くるみさんを殺せばあんたはくるみさんの父親と同罪だ」

コナンの言葉に高松は泣き崩れた。

「なあ自首しなよ」

コナンは座り込んでいる高松に優しい眼差しを向けた。が、高松は小さく首をふった。

「無理だよ。こゝはもつすぐ川の水が満タンになる……みんな溺れ死ぬ……」

高松の言葉とほぼ同時に水が入ってきた。

第七話～理由～（後書き）

遅くなりました。

忙しくてなかなかこれませんでした。

暗号解読……

つて暗号なのかな？

簡単でしたね！

6月16日のコナン、オープニング決定！

倉木麻衣さんの「一秒」とに love for you

エンディング未定。

では

第八話～脱出への道～

止まる」となく水はどんどん流れ込んできた。

「ぐぬみさん…おきてぐぬみさん…」

「ナンは必死でぐぬみをおじりつけとしました。

「じゅあね。」
「ナン君」

「何…？」

背後から高松は「ナン」に薬をかがせた。

「……っ」

「ナンは体の力がぬけるようにその場に倒れ込んだ。高松は「ナン」を壁に凭れさせそのまま立ち去った。

「あぶねえ」

「ナン」は少しだけ薬をかいだ後氣を失つふりをした。が、体が思うように動かなかつた。それでも必死にぐぬみを起こしつづけた。もう水は「ナン」の膝までつかつていた。そしてやつとぐぬみは目をさ

ました。

「良かった……ぐるみさん大丈夫！？」

「ええ……それより」「なぜ」「なに？」

「『めん……俺にもわからないんだ。水が入ってきてるって』とほ
どつかの地下だとおもう」

「そう。多分鶴の川の近くだと思つわ

「鶴の川？」

「ナンは真剣に聞き返した。話す間も出口に出るかもしれない薄暗
い道を時計型ライト一つで進み続けた。

「ええ。家からひっ遠くなこと」「あるの

「そつか。その川の水かもしれねえってわけか

「そつか。それより肩見せて？」

「へ？」

真剣な話しから一気に逸れたことに氣の抜けた言葉が出た。

「血がでてるから

「いいよ。別に…そんなに痛くねえから

そのまま前に進もうとするコナンの腕をぐるみがつがんだ。

「ダメよ。 その怪我のせいなんでしょう？」

「違うよ？ 勝手に逆らつたのは俺。 ぐるみさんは悪くないから。 それにもう止まってるから。 進もうぐるみさん？」

コナンは左手で右肩を触りくるみに微笑んだ。

そしてまた進み始めた。 静かに暗闇を歩いていく。 道は一本道、迷いなく前に前に進んだ。 水はいつしか止まり始めていた。 五月といえど長時間水の中はきついものだった。

そして、肩の傷より足にあたつた傷のせいで額からは汗がつたつた。 水の中のため止まることなど無かつた。 しかしぐるみを困らせないようこするため元気にふるまつた。

歩き歩いた先にみえたのは行き止まりだった。

第八話～脱出への道～（後書き）

長らくお待たせしました！

つて、待つてくれた方々いたのだろうか……

まあ組織でもない恋愛でもない話題に田舎を輝かせる方々すくないで
すよね。

でも、いらっしゃるかた本当に嬉しいです。こんな不評な作品をよ
んで下される方ありがとうございます。

第九話～脱出～

（鶴の川）

小五郎と蘭、警察とで川の周りを調べ歩き回った。

「ねえ、お父ちゃんがナシ君たちいた？」

蘭が心配そうに小五郎を見る。

「いや。何処にもいねえよ」

「わ、……」

蘭の顔が一気に曇つていいくのがみえた。

「だーーーーー見付けてやるから、んな顔してんじゃねえよー。ほ
ら探すぞーーーー！」

「ぶつかりぼつに」励ます小五郎に、少し笑顔をとつもどした蘭が頷いた。

（あのボウズ、探偵なら少しは手がかりのこしどけつてのー。おま
がいねえと蘭が蘭じゃなくなるんだ。わかつてんのか？）

小五郎はひたすら手がかりを探した。

蘭は小五郎から少しはなれ森へ森へと進んだ。

行き止まりに差し掛かり自分たちが地下にいることを改めて理解した。

(「どうだ？ どつかに出口に関係あるものがあるはずだ。高橋はどうから出入りしたんだ？」)

コナンは周りを見渡す時計型ライトでくまなくさがす。

「ねえくるみさんー壁に何かあるか調べて！」

「ええ、わかつたわ！」

地下というもので酸素も薄い。いくら水が止まつたからと言え下半身が漬かつた状態では何れは凍死か酸欠で死ぬ運命だつた。そしていつ一二次災害がおきるかも分からなかつた。ひたすら一人は壁をしらべた。

「コナン君ーー！」

くるみは自分の目線より少し高い位置にある物をしめした。

「まさかー！」

コナンはその周りを調べ始めた。

自ら溜まつた水の中に手を突つ込む。

(「これかー！」)

「ナンは手に触れた物を掴みあげた。

「ロープ？」

「そう、これが上からつられていたんだ。多分高橋さんがね。」

そこに出でたものは真新しいロープ。

くるみは上を見上げ不安な顔になる。

「ね……私たちどうなるの？ 死んじゃうの？」

徐々に涙がわき出でくるくるみと裏腹にコナンは笑みを浮かべた。
「大丈夫。ここに梯子が備え付けてあるから」

コナンは少し歩き梯子に手を軽く叩いた。

「多分高橋さんしらなかつたんだよ。梯子があること」

そう言いながらくるみにボタンを押すのを促した。
くるみはボタンを強く押した。

ガガつと上方から音を出して開いていく。その光景を少し離れた
場所から一人は見た。

「よし！ いい。くるみさん」

くるみを先頭に一人は梯子を上りはじめた。

第九話～脱出～（後書き）

長らくお待ちしました。

凄くゆっくりペースをお許し下さい。

今日で脱出です！

次は地上で……

おっしゃんつてあんな感じにコナンを心配するのかな。作者自身ではしてそうなきがするんですが……

6月16日エンディング決定

上木彩矢“summer memories”です

マトメ

6月16日からのコナンのオープニングは

倉木麻衣“一秒ごとにlove for you”

エンディング

上木彩矢

“summer memories”

ちなみに監督さんが

於地紘地監督にかわります！

第十話～悪魔に勝つ天使～

梯子を登るのも数分眩し光の中ぐるみが出た。続いてコナンも登りきった。息を整えているのもつかのまコナンはすくに力で中に浮いた。

その光景を驚きながらぐるみは見上げた。

そこにいたのはコナンを抱えた高橋だった。

「コナン君を離して……関係ないじゃない！」

「すみませんね。でもこのぼうやは知りすぎています」

「でも、まだ子供だよー小学生に理解力ないわ。だからお願いー！」

「では、ぐるみさんがその穴に落ちればぼうやを助けてあげる」

高橋はコナンを持つ反対の手で先ほど登ってきた穴に指をさした。
「ほんとに返してくれるの？」

「ええ約束します」

ぐるみは少しづつ前に進んだ

「駄目だよ……ぐるみさん。こんな人の言つこと聞いてりや……ひ……」

高橋が最後まで言いかけたコナンの首を締める。
その時高橋の顔に誰かの足があたつた。

「ぐあ……」

高橋が奇妙な声と共に倒れた。その弾みでコナンが投げ飛ばされた。

「コナン君！」

間一髪でくるみがキヤッチした。

そのままくるみは尻餅をつき危うく穴に落ちそうになつた。

そして落ち着いた光景を一人はみた。

「蘭さん！」

「蘭ねえちゃん！」

一人が驚く先には蘭が立つていた。

「どうしてここに？」

「森の中コナン君たち探してたらくるみさんの必死な声聞こえて来てみたら、高橋さんがコナン君を捕まえてたから後ろから回し蹴りをしたのよ」

蘭は伸びきつてる高橋を睨んだ。

「でも、一人共何とも見つかって良かつた」

蘭は胸を撫で下ろした。

「はい。あ、それから救急車呼んでください。コナン君怪我してるみたいだから」

蘭の前にコナンが驚いた。

「足……見てたらわかるよ……。ずっと隠してたでしょ？」

「か、隠してなんかないよー。」

両手をふり弁解してみるが逆に一人から睨まれた。

「コナン君？　またムチャしたのね？　ほら」

蘭は少し怒りながらも背中を向けコナンの前にしゃがんだ。

「いいよー。僕歩けるから」

「いいから乗りなさい」

「ほりー。照れない照れない」

くるみがコナンの背中をそっとおした。コナンは赤くなりながら蘭の背中に乗つた。

「おーーーい」

遠くから小五郎や警部が走ってきた。

「お父さんー。犯人高橋さんだつたの」

近づいてきた小五郎に蘭が説明した。そして伸びている高橋を起こし連行された。

第十話～悪魔に勝つ天使～（後書き）

お待たせしました！

今回

悪魔 高橋

天使 蘭

です

蘭の回し蹴り炸裂

痛そう……

蘭来てなかつたらくるみも「ナンもどりつなつてたか
まあ

麻酔銃で眠らされてたかな、高橋。

そうだ。

くるみさんつて蘭と同級生なんだ～設定では。

次回最終話だつたとおもいます。

最終話～平和～

その後レッドアップブルジュエリー株式会社は何事なくオープンされた。

蘭とコナンはそのジュエリー店に足を運んだ。

「蘭ちゃん！ コナンちゃん！」

くるみは手をブンブン振りながら一人を向かえてくれた。

「コナン君、蘭さん。 私はずつとお礼言つて無かつたね。 先日助けてくれてありがとう。」

くるみは深々と礼をした。

「そんな、顔上げてください。 私たいしたことしてませんよ。」

「そんなことあつません」

くるみはコナンと蘭に一つの包みを渡した。

「へりみさん？ これは？」

蘭は目を丸くしてくるみを見た。

「助けてくれたお礼です。 蘭とコナン同じペンドントです」

「コノコノながら、開けて見て、つと一人を促した。

「わあ。 これあの時のペンドントじゃない？」

「さうよ事件が起きる前に蘭さんに選んであげたペンダント。気に入つてもらえると嬉しいわ」

「ありがとうございます」

蘭は喜んで、ペンダントを首につけた。

コナンは微笑ましく一人をみやげていた。

それに気付いたくるみはしゃがみこみ耳元で囁いた。

「大きくなつたら着けるのよ」

くるみが立ち上がりまた蘭と一人で話してゐるなかコナンは顔を赤らめていた。

（帰り道）

蘭とコナンは夕日をバックに歩いていた。

「くるみさん元気だつたね！」

「そだね！ お父さんと仲直りしたみたいだね」

「それでコナンは？」

「え？」

「“え？”じゃないわよ。怪我よ怪我」

「大丈夫だよ！ 大袈裟な怪我じゃなかつたしね」

「一二一二」蘭を見上げた。

最終話～平和～（後書き）

ありがとうございました！

無事終わりました。

白石早苗先生、田中麻奈先生、暖華先生、空色カエテ先生、北野文
萌様

評価感想ありがとうございます。。

とてもはげみになりました。

今回は恋愛の一切入っていないただの事件でした。
これからもよろしくお願いします。

まだまだ評価感想受付中（笑）

お知らせ～

1、やつと来週テレビナン始まりです

6月1~6日（月）「505話・弁護士妃弁護士の証言（前編）」

2、6月15日から6月29日（30日）休みます。

理由：実習があるので。

あと、他の小説の事で少し考え～ことがあるので。

30日出来れば短編小説を投稿する予定。
(7月に会えるかは未定。)

以上。

では、またいつか会つ日まで

2008年6月12日

菜花より

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2548e/>

レッドアップル

2010年10月9日04時32分発行